

令和5年度第2回富山県公立大学法人評価委員会 議事録（概略版）

- 1 日時 令和5年8月3日（木） 13:30～14:10
- 2 場所 富山県立大学射水キャンパス 9階特別会議室
- 3 出席委員
 - ・金森 俊幸〔(一社)富山県機電工業会会長・田中精密工業(株)相談役〕
 - ・酒井 康彦〔名古屋大学特任教授、名誉教授〕
 - ・茶木 梨津子〔公認会計士、税理士〕
 - ・林 幸秀〔(公財)ライフサイエンス振興財団理事長〕※委員長
 - ・藤重 佳代子〔(株)マーフィーシステムズ代表取締役社長〕※欠席
- 4 会議の概要
 - ・司会が開会を宣し、県経営管理部長より開会の挨拶
 - ・司会より、林委員長に議事の進行を依頼し、以後の進行については委員長が行った。
 - ・委員長より、(評価の対象である)法人が本日の委員会に最後まで同席することについて、委員の了承を得た。

議事1 令和4年度の業務実績に関する評価について

＜事務局説明＞

資料1に基づき、令和4年度の業務実績に関する評価(案)について説明

(委員長)

大学より、事務局を通して、前回議論した業務実績について追加的な説明をしたいという要請があった。委員の皆様にも異議がなければ、これを許したいと思っているがよろしいか。

それでは、追加の説明を、大学側の方からよろしくお願いしたい。

(法人)

前回の評価委員会で提出した業務実績の、教育に関する目標に対する取組み

に係る情報工学部の開設準備について追加の説明を行いたい。

情報工学部開設の取組みについては新校舎の基本設計の実施した点などで記載があるが、情報工学部の開設はもともと年度計画には記載のなかったものである。

経緯としては、現知事は公約として県立大学へデータサイエンス学部の設置ということ掲げており、大学でも内々に検討を進めていたところ、昨年5月に知事がデータサイエンス学部を2年で開設したいということ表明され、この知事の表明を受けて、大学において、それを実現すべく全学を挙げて新学部の設立準備に取り組んできた。

具体的な取組みを挙げると、新学部設立のために、まず7月に事務局に新学部設置担当課長、10月には設置準備班を設置し、体制を整えた。また、新学部の入学定員や、教員の確保、教育理念やカリキュラムの整備、教員組織の在り方、新学部の施設整備について検討を進めるため、委員会を昨年7月に設置し、今年3月まで、9か月の間に14回の委員会を開催した。

事務局の所感を申せば、教員の確保や、カリキュラムの整備、組織の検討など、非常に大きな事柄でなかなか大変ではあったが、全学を挙げて取り組んだ結果、データサイエンス系の学部、学科の開設が全国で相次ぐ中、人材についても教員数を確保することができ、極めて短い期間ではあったものの、10月には文部科学省に対し事前相談を行い、そして12月には同省から届出による設置が可能ということで、令和6年4月の開設に向けてのゴーサインをいただいた。

昨年度は非常に時間のない中、また、取り組むべき項目が多い中、全学を挙げて取り組み、情報工学部開設への道筋を確かなものにしたと考えている。

(事務局)

県としても、県立大学には計画どおり情報工学部設置に向けて準備を進めていただいたということは評価に値するものと考えている。

(委員長)

通常、新しい学部を開設するには4年程度かかるものである。

2年間で開設するというのは、期間的な問題もあったのではないかと。

(法人)

新学部の開設には通常は4年、早くても3年はかかるとされているところ、どうすれば2年間での開設が可能になるかと考えたときに、設置認可ではなく届出でやらなければそれは無理だろうと。届出で行うには幾つ問題はあるが、最大の問題は教員の確保であった。その教員の確保に、学長を先頭にいろいろなつても頼りながら公募を行い、昨年度中に8名の方を採用することができた。また、昇任人事も8件行った。そういうことがあって、文部科学省に届出での情報工学部設置が認められたものとする。

(委員長)

それでは、1つ目には、今ほど追加の説明があった教育に関する目標に対する評価について、2つ目には、事務局より説明のあった評価(案)について議論を行いたい。

最初に、教育に関する目標に対する評価について委員のご意見をお願いしたい。

(委員)

富山県立大学においては、今般の情報工学部をはじめ、DX教育研究センターや看護学部、看護学研究科・専攻科など、学部や教育機関等の新設に非常に力を入れており、相当の結果も出てきている。教育に関する目標に対する評価はSにあげてもよいのではないか。

(委員)

前回の評価委員会でも、看護学部については、第1期卒業生の県内就職率が62.8%で入学者に占める県内出身率を上回ったという話があった。大学の教育のなかで富山県に定着して就職していこうという学生が増えたということは非常に中身のある教育の結果であったといえる。

今般の情報工学部の開設についても、当初の計画にないなか、迅速に準備を進められたということで、教育に関する目標に対する評価はSにあげてもよい

のではないか。

(委員)

国立大学では教員のポストを増やすのは非常に難しいが、先ほど説明のあった8人の採用というのは、既存の教員の定数の枠内の中で行ったものなのか、それとも増員して採用したものなのか。

また、情報工学部に関する記載は研究に関する目標のところにもあるが、今回説明のあった、情報工学部の開設の取組みは教育に対してどのような影響のあるものなのか。

(法人)

情報工学部については、工学部から移管する智能ロボット工学科と情報システム工学科、新たに設置するデータサイエンス学科の3学科からなる。組織の再編に合わせて、教員の学科間の異動や昇任も行った。新たに公募した8名については、既存の定員より増員して採用したものである。

(法人)

情報工学部の開設が教育に関してどのように評価されるかという話であるが、情報工学部のカリキュラムについては、工学部から移管した学科も含めて、今までの工学部のカリキュラムをそのまま使うのではなく、新しく作り直している。来年の春からの新入生からは今までとは異なる、ユニークなカリキュラムで教育を受けていただくことになる。

また既存の工学部のカリキュラムについても、社会が求めるものに対応するために、情報分野を取り入れたものへの再編に取り組んでおり、大学全体での底上げを行っている。

(委員)

短期間のうちに教員の増員やカリキュラムの編成に取り組んだことは、教育のための準備といえ、高く評価できる。教育に関する目標に対する評価はSにあげてもよいのではないか。

(委員長)

情報工学部の開設については、知事の公約ということで、大学にもプレッシャーがあったと思う。そのような中、短期間のうちに、開設への道筋をつけたということは高く評価でき、教育に関する目標に対する評価はAからSにあげてもよいと考える。

(委員長)

それでは、意見を合わせると教育に関する目標に対する評価はAからSにあげるというふうにしたいと思うが、いかがか。

(各委員)

異議なし

(委員長)

それでは、次に資料1の評価(案)についてのご意見をお願いしたい。

(委員)

光熱水費の増については、前回の評価委員会でも議論となっていたかと思うが、電力使用量はどれだけ増えたのか。DX教育研究センターの供用が開始されたことによる増もあるかと思うが、省エネの努力の成果は上がっていたのか。

(法人)

DX教育研究センターでの使用量を除けば、使用量は前年度より少ないと考えるが、目標値としてはDX教育研究センターでの使用量も含めて前年度比99%としていたところ、実際の使用量は前年度比100.3%であった。

今年度については、LED化による影響もあり、前年同月比で3%から4%減で推移している。

(委員)

今回、目標値をオーバーしたのは、DX教育研究センターの供用開始で増える使用量を見込んでいなかったからなのか。

(法人)

DX教育研究センターが供用開始することは当然分かっていたが、それでも全体的に1%削減するという目標にしていたものである。

(委員)

今後、新たに情報工学部棟などができるが、電気使用量の削減目標値を定めるときは、単純に1%減とするのではなく、新しい建物の電気使用量などを分析して、根拠のある目標値を設定されたほうが良い。

(法人)

今までは、大学としては新しい建物ができたとしても、トータルの電力使用量を減らすという目標でやってきたため、新しい建物ができた際にどのぐらいの使用量の増加になるかということ进行分析して見積もってきていなかったのが実情である。今後は、建物ごとに使用量の分析をし、妥当性のある目標値を設定していきたい。

(委員)

電気料金の話だと、今回のような赤字を今後継続しないためにも、適切な数値の管理や分析が重要である。光熱水費が今後上がり、県に追加的な運営費交付金を要求する際にも、根拠となる積算がしっかりなされていないと適切な要求もできない。また、ただ使用量を減らすということだけではなく、量と単価を見たときにそれが経営にどれだけのインパクトを与えるのか、予算を確保するためにはどうしたらいいのかという分析も必要だと思うので、検討いただきたい。

(委員)

教育に関する目標の特に評価する事項として、看護学部の第1期卒業生の県内就職率は62.8%となったというのがあるが、大学としてはどのように考えているのか。

(法人)

大学としては目標値を60%以上として取り組んできた。それをクリアしたことと、入学者に占める県内出身者割合である58.5%よりも高かったことは評価できるものと考えている。

(法人)

昨今、優秀な大卒の看護師を現場に定着させたいということで、富山県外の医療施設からの求人も多い中、実習などで県内の医療機関が丁寧な指導をしていただき、それに対して学生たちが、ここで自分の将来を、職業人生の第一歩を歩もうと決断をした結果、この62.8%という数字を生み出したものと考えている。

(委員)

地域貢献に関する目標で設定されている社会人向けセミナーや公開講座受講者数、地域課題解決に向けた企業、NPOとの連携団体数などの数値目標は令和4年の実績も高い水準にあり、地域貢献に関する目標の達成度は高いものと考えているが、大学としてはどのように考えているか。

(法人)

地域貢献に関する目標でいえば、紹介のあった数値については目標を上回っているものの、コロナの影響もあり、国際化の推進に関する数値は目標値を大幅に下回っている現状にある。

(法人)

県立大学は地域の知の拠点として、地域連携センターや学生団体を通じて、

どこの大学と比べても優秀な地域貢献、交流活動をやってきたという自負がある。昨年度からはDX教育研究センターにおいても取組みを進めており、今後とも高い水準で地域貢献活動を維持させていきたい。

(委員)

全般的な地域貢献という点では非常に頑張っておられ、もう少し評価を上げてはと思うが、国際化の推進の点などで大学側でも少し課題を感じているというところもあるようなので、地域貢献に関するも目標に対する評価という点では、A評価のままでもよろしいのではないかと考える。

(委員長)

他に意見はあるか。

ないようなので、それでは、令和4年度の評価については、評価(案)から今回意見の出た、教育に関する目標に対する評価についてはAからSに変更するという進めたい。具体的な評価の記載については事務局と協議して、委員長である私に一任とさせていただきたい。

(各委員)

異議なし。

(委員長)

それでは、本日の議事はこれで終了する。